

「コロナ差別」は仕方ない？ 私たち大人が、子どもたちに示すこと

8月、鳥取県は新型コロナウイルス感染症に関連する差別や偏見を防ぐため、「新型コロナからみんなを守る鳥取県民宣言」を採択しました。さらに、ネット上での感染者などに対する誹謗中傷の投稿を保存し、被害者が訴訟を起こす場合の証拠品として提供することを決定しました。

差別が容認される社会

感染者を中傷するビラ配布、感染者宅への投石や落書き、従業員に感染者が出たことで営業停止に追い込まれるなど、「コロナ差別」が社会問題となっています。積極的に差別行動はしないものの、真偽不明、誇張された情報が確認されないまま、その感染者への非難は仕方ないと差別を容認する風潮も懸念されています。

この「コロナ差別」が蔓延する社会で、もし私たちが、私たちの大切な人が感染した場合、素直に感染したと言えるでしょうか？

誰もが感染の可能性がある病気だと認識し、他人事ではなく、自分事として今の「コロナ差別」を捉えることが大切になっています。

子どもたちに示すこと

また、ガンジーは、「恐怖は、マラリアや黒熱病より恐ろしい病気である。マラリアや黒熱病は体を蝕(おしば)む。しかし、恐怖は精神を蝕(おしば)む。」と言いました。コロナに恐怖していれば差別することさえ許される。本当に怖いのは、心がこのように思い始めることです。

私たち大人の姿を、子どもたちは真っ直ぐに見ています。「差別やいじめは絶対にいけないこと」を大人が示す絶好の機会です。